

「信心」

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第12回：「信心」

本年はじめてのお話は、臨済会の「法光」正月号に掲載された朝比奈宗源老師のお話「信心第一」のお話を元にさせていただきます。

朝比奈宗源老師の信心は、「佛心の信心」だとおっしゃいます。

「信心」とは、『広辞苑』では、「仏教における信仰の念」とあります。

「信仰の念」では、信じ仰ぎ見ることになってしまい、禪宗の信心、老師の信心とは、少し違うように思います。

老師は、「お釈迦さまがお悟りになったと同じ佛心は、人には一人の例外もなくそなわっていて、佛心の上には死に生きということはなく…空間的には全宇宙をつつんでおり、時間的には…おおむかしから…はてしない未来までつらぬいているのです。」とおっしゃいます。

佛心は、お釈迦様と同じく私たちに具わっており、私たちを包んでおり、私たちを貫いているといいます。

佛心とは、私たちを含めて宇宙を司る理そのものだけということです。

佛心が、お釈迦様の納得した事と同じく私たち自身にも具わっていると疑わな
いことが信心なのです。

自分の上にある何かを仰ぎ信じるのではなく、自らの心に具わっている佛心
を信じることなのです。

私の信心をお話させていただきます。

私の信心は、修行道場に入門するまでは、漠然とお釈迦様と仏教への憧れを
仰ぎ見て、信心と思い違いしていたものだったようです。

私が道場に入門したのは、40才を過ぎてからです。それまでは普通の会社員
でした。

同じ時期に入門した修行僧たちは、皆20代の若者ばかりです。

ですから、私の頭も身体も固くなっており、お経を覚えるのも、食事の作法
を覚えるのも、掃除をするのも他人の3倍くらい掛かりました。

目の前の事で、頭と身体はいっぱいいっぱいになっていたのです。

修行道場の劣等生でありました。

坐禅とは、自己を見つめることです。自己を見つめ、解いていくことです。

どうも私が思っていた私自身は、外部の社会的条件の集合体のようなものだっ
たようです。

自分を解いていくうちに、自分だと思っていた構成要件がどんどん無くなって

きてしまいました。

私は、私にいったい何が残るのだろうか、何もないのではないだろうかと怖く
なっていました。

怖れと不安の中、同じ時期に入門した若い修行僧たちに遅れまいとその瞬間
にしている坐禅はもちろん、掃除や食事など生活のその場面ごとに何の余裕も
なくいっぱいいっぱいになっていました。

そのいっぱいいっぱいの生活に慣れてきたころ、ふと気がつくと、坐禅が楽
しみになっているのです。

毎日、道場の先輩に叱られてばかりの生活の中、坐禅に一心に取り組むこと
が救いになっていたのです。

道場の生活の中心である坐禅が楽しみになり、一心になることが救いになる
につれ、いっぱいいっぱいの道場の生活が苦にならなくなってきたのです。

臨濟禅師は「心は、眼にあっては見るといい、耳にあっては聞くといい、鼻
にあっては嗅ぐといい、口にあっては話し、手にあってはつかまえ、足にあっ
ては歩き走るものだ」といいます。

生活そのものが心の働きであるというのです。

そして、生活とは、命の働きです。

私たちは、生活に苦を感じる時があります。

それは、欲や感情の目盛りを他者（他人ばかりではなく自分の過去や未来の予測も含めて）のメモリと比較してしまうからです。

余計なことを考える暇もなくいっぱいになり、それでも生活の中心に一心に心と身体を働かせることがあると救われるという経験をしました。

命の働きを何の疑いなく一心に働くことができ、その一心がお釈迦様と同じ心の働きだと疑いなく信じることができれば、それが私にとって信心になるのだと観じています。

命の働きの可能性を信じるのが、私の信心なのかもしれません。

以 上

(蛇足) 下世話な喩えですが、ことわざに「鰯の頭も信心から」があります。信心深い人を揶揄していわれることが多いようですが、信仰心の不思議さを指して使われたのが本来ではないでしょうか。今回のお話を伺って、信心・佛心が誰にもそなわっていて、くるしみにあっても、さあ一っと迷いが晴れてみれば、そこに佛心がある、そのこと不思議さ、ありがたさ、佛心の力を昔の人は教え諭したもののようには思われます。現代の私たちは私たちに、このことに思いをやり、坐禅をならって行住坐臥、日々の「存在の可能性」、「いのち」の糧にできれば、と思いました。

また、誰もがもつと言われる「佛心」の類推として、例えば、偽薬によっても、人間がもつ体内の治癒力が引き出され、病気が治癒することを現在の医学は、証明していることも想起されました。「法は良薬なるがゆえに帰依す」です。

(文責 中村 彰利)